

【特集】

中世スラヴ世界における「疫病」の表現と表象

三谷 恵子

はじめに

2020年新春早々に発生した新型コロナウイルス感染症—COVID-19は瞬く間に世界に拡散した。2021年初頭までの1年間に、米国で40万人、英国で10万人、世界全体では190万人が亡くなるという痛ましい状況に至り、現代人の間に、中世の時代さながらの疫病に対する恐怖をよみがえらせた。社会活動のさまざまな面も多くの直接的、また間接的な被害を受け、思いがけない形で、現代社会の構造的な脆さが露呈されることとなった。とはいえ、現代の医療技術は異例の速さでワクチン開発を可能にし、2021年はじめには欧米や世界各地でワクチン接種が始まるなど、先行きの不透明さへの不安は払拭されないにせよ、コロナ禍であえぐ世界に、いくらかの光明が見えるまでになった。

こうしたコロナ禍の中、人類の過去にどのような疫病がおこり、古い時代の人々がどのようにこれに向き合ったのかを記述した著作——ジョン・ケリーの『黒死病 ペストの中世史』（野中邦子訳、中公文庫、2020年〔原著初版は2005年〕）や、H. シゲリスト『文明と病気』（水上茂樹訳、兼文社、2020年〔原著初版は1943年〕）、あるいはまた疫病を題材とした文学作品——ダニエル・デフォーの『ペスト』やカミュの『ペスト』、また最近阿部賢一訳で日本にも紹介されたチャペックの『白い病』（岩波文庫、2020年）など——があらたに注目されることとなった。

じっさい、疫病の歴史は人類の歴史と同じくらい長いものだろうが、原因が解明され科学的に対策がとられるようになるのは、その長い歴史からすれば“つい最近”のことである。原因も治療法もなかった中世において人々が、個人にとってもまた社会にとっても致命的な病であった疫病をどう受け止め、いかに対応してきたのかを知ること、**「死」という人間にとって根本的な問題を、それぞれの時代の文化がどう解釈し、自らを納得させてきたかを知ること**でもあるだろう。上記にあげた著書や作品はそうした問題への鍵を読者に提供してくれるものだが、これらはおもに西欧や、西欧との関係で捉えられた新大陸の状況に焦点があてられており、近代前の東欧スラヴ世界において疫病がどのように扱われていたかについて、すくなくとも日本語で紹介されたものはほとんどない。

本稿では、こうした事情をふまえ、ごく短く、断片的ながら、中世スラヴ世界とく

に東方教会圏スラヴ地域における疫病の表現と表象を、古スラヴ文献の記述から探っていきたい。

1. 最古期の翻訳文献にみる疫病

1.1. 古代から「疫病」——以下ではこの表現を、さまざまなウィルスや細菌が、媒介生物や空気、水、食物などを通して人体を害する感染症の総称とする——は、自然災害や飢饉とともに、天から下される災い、神の罰としてとらえられていた。旧約聖書列王紀Ⅱ（西方教会聖書ではサムエル書下、以下では列王紀Ⅱとする）24章11-15には次のようにある¹——

ダビデが朝起きると、神の言葉がダビデの預言者であり先見者であるガドに臨んでいた。「行ってダビデに告げよ。主はこう言われる。『わたしはあなたに三つの事を示す。その一つを選ぶがよい。わたしはそれを実行する』と」

ガドはダビデのもとに来て告げた。「七年間の飢饉があなたの国を襲うことか、あなたが三か月間敵に追われて逃げる事か、三日間あなたの国に疫病が起こることか。よく考えて、わたしを遣わされた方にどうお答えすべきか、決めてください」

ダビデはガドに言った。「大変な苦しみだ。主の御手にかかって倒れよう。主の慈悲は大きい。人間の手にはかかりたくない」主は、その朝から定められた日数の間、イスラエルに疫病をもたらされた。ダンからベエル・シェバまでの民のうち七万人が死んだ。

この、疫病を神の罰ととらえるヘブライ的世界観はキリスト教にも引き継がれ、後述するように、キリスト教を受容したスラヴ人にとっての疫病にたいする認識を形成するものにもなった。

さて、ここで「疫病」を表すために使われた表現に注目しよう。ここで使用されている表現は、ヘブライ語が שָׁלֹשׁ יָמִים 、これに対応するギリシャ語は LXX で $\text{\tau\rho\epsilon\iota\varsigma \eta\mu\acute{\epsilon}\rho\alpha\varsigma \theta\acute{\alpha}\nu\alpha\tau\omicron\nu}$ 「三日間の死を」と、疫病を「死 $\theta\acute{\alpha}\nu\alpha\tau\omicron\varsigma$ 」としている²。では、古いスラヴ語で「疫病」はどのように表現されたのだろうか。

“スラヴ人の使徒” コンスタンティノス=キュリオスの兄メトディオスの生涯を記した聖人伝『メトディオス一代記』では、メトディオスは「マカベア書を除く聖書をすべてギリシャ語からスラヴ語に訳した」と記しているが³、じっさいには、東方正教会で礼拝に使用されなかった聖書の部分、とくに旧約聖書の大半については、実際的な需要がなかったためか、14世紀より前のスラヴ語訳写本はほとんど残されていない。1499年にいわゆる『ゲンナジー聖書 (Геннадиевская Библия)』⁴ がロシアで作

られるまで、スラヴ語訳が事実上存在しなかった書もある。上記に引用した列王紀Ⅱの箇所も、スラヴ語訳写本は15世紀以降のものしか現存しない。しかしこれら15世紀のもの——代表的には、ゲンナジー聖書の中の列王紀——は、「メトディオス系訳」(околомефодиевский перевод)を伝えるものであると多くの研究者がみなしている⁵。そこでこの箇所を、ゲンナジー聖書と同じ系譜に属する『オストロフ聖書(Острожская библия)』で確認すると

Г, дѣни смерти въ земли твои быти . . . избра себѣ дѣдѣ самъ смерть

「三日間あなたの国に死(疫病)が起こることか……ダヴィデは、自ら死を選んだ」

と現れている⁶。ここに用いられている смерти(<сѣмръзъть)は、もちろんスラヴ語で「死」をあらわす語で、ギリシャ語の θάνατος に直接対応している。ここからは、列王紀をギリシャ聖書から訳したスラヴ人が、「疫病」を底本にあるとおりに「死」と直訳したように見える。これと同様の例は、古教会スラヴ語カノン⁷の一つで、グラゴル文字で書かれた現存する最古の詩篇訳である『シナイ詩篇』の77:50にもみられる。ここでは

не пошгиадиа отъ сѣмръзъти дѣла ихъ. ꙗко сѣмръзъ во сѣмръзъти затвори⁸

「彼ら [=家畜] の魂を死に渡して惜しまず、命を疫病に渡し」(新共同訳)

とあり、сѣмръзъти が「疫病」を表す語として用いられている。この箇所も、ヘブライ聖書では רָבָה (「疫病に」<רָבָה [pestilence 疫病])だが、LXXでは οὐκ ἐφείσατο ἀποθάνατον τῶν ψυχῶν εἰς θάνατον (「死に」となっており⁹、スラヴ語訳は底本のギリシャ語にあった「死」をそのまま直訳した可能性を示唆している¹⁰。

しかしながら、сѣмръзъть がギリシャ語の「疫病 λοιμός」を表すために用いられた例もある。これは『偽パタラのメトディオスの預言書』(Apocalypse of Pseudo-Methodius [ロシア語で Откровение Мефодия Патарского; ブルガリア語 Откровение на Методий Патарски])で確認することができる。

『偽パタラのメトディオスの預言書』は、7世紀頃のシリアで、イスラーム勢力の進出に脅かされていたキリスト教徒が創作したとされ、8世紀にはギリシャ語、ラテン語へ訳され、ビザンチウムの8世紀以後の終末論形成に決定的な役割をはたした¹¹。スラヴ世界には、第一次ブルガリア帝国時代の10世紀頃にギリシャ語テキストから訳されて知られるところとなったとされる。スラヴ語訳は、この、もっとも古い訳のほか、おそらく第二次ブルガリア帝国時代の14世紀頃に再度作られ、またその間にも、11世紀より前にもう一つの訳、あるいは別のリセンションが存在した可

能性がある¹²。最後のものは、15世紀頃のロシアで「加筆増補版（интерполяционная редакция）」として知られるバージョンの元になった。東方教会圏スラヴ中世の終末論も、『偽パタラのメトディオスの預言書』に大きく影響を受けている。

この『偽パタラのメトディオスの預言書』は、アダムとイブの時から、最後の審判とメシアの到来までの歴史を事後予告の形で伝える物語だが、10世紀頃のものともみなされる最古のスラヴ語訳では、その7番目のミレニアムの章の終末的狀況をこう記している――

НАПЪЛНИТЬ СЕ ЗЕМЛѢ ВѢТЪВЪВАННАЯ Ѡ ЧЕТЫРЕХЪ ВѢТРЪ НЕВЕСНЫХЪ И БОУДЕТЬ ПРЪГЪ МНОЖЕСТВО. И СЪВЕРΟΥТЬ СЕ Ѡ ВѢТРЪ И БОУДЕТЬ НА НЕИ ГЛАДЬ И СМРЬТЬ¹³

「そして約束の地は天の4つの風によって現れた人々で満ち、イナゴの大群が出現し風で集められ、そこには飢饉と疫病（“死”）が起こるだろう」

ここに出てくる「飢饉と疫病」は、ギリシャ語写本で λιμός και λοιμός であり、あきらかにスラヴ語訳者が λοιμός にたいして смръть（古教会スラヴ語式には сѣмрътъ）を用いていたことがわかる。

このように сѣмрътъ は古スラヴ語で「疫病」を表すために用いられる語彙の一つであり、つまりスラヴ人は、疫病という現象を、そのもっとも顕著な特徴である「死」と結び付けて言語化していたのである。ただしもちろんこれはスラヴ人に限ったことではなかっただろう。上記の LXX にみられる列王紀や詩篇の θάνατος の例は、ギリシャ語でも「死」という語が疫病を表すために用いられていたことを示しているし、14世紀にヨーロッパを襲ったペストについて *Atra mors*（「大いなる死」）という表現が現れ、これが *Black Death* という、ペストを指す英語表現の発生となったという事実もある。こうしたことを考えると、疫病を「死」としたのは、スラヴ人が住んでいた地域を含む広域的な文化圏で共有されていた、疫病に対する表象の反映であったといえるだろう。

1.2. 文字文化をもったばかりの頃のスラヴ人が сѣмрътъ という語によって「疫病」を表していたことは確かだが、古スラヴ文献を探ると、ほかにも「疫病」を示す語彙があったことがわかる。

新約聖書の福音書にも、終末論的世界観を反映した部分があることはよく知られている。たとえば、ルカによる福音書 21章 10 には「民族は民族に、国は国に敵対してたちあがる。そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる」（新共同訳）とある。これとほぼ同じ表現はマタイ福音書 24:9、マルコ福音書 13:8 にもみられるが、まず、ルカ福音書のこの箇所のスラヴ

語訳を確認してみよう。古教会スラヴ語時代に作られた四福音書の全訳であるマリア写本（Codex Marianus）を見ると、次のように書かれている――

Трѣси же велици по мѣста. и глади и мори вѣдѣтъ.¹⁴

「至る所で地震、飢餓、疫病が起こるだろう」

ここでわかるように「疫病」（λοιμοί）は мори（<морь）と訳されている¹⁵。

морь は、ブルガリア語 мор「疫病、ペスト」、セルビア語 мор「疫病」、古チェコ語 mor「ペスト」、古ポーランド語 mór「伝染病」など、スラヴ世界に広く見られる語で、スラヴ祖語の動詞 *mertī（印欧祖語 *mr-ti）に対する o 階梯の名詞形である。もちろん、同語根 *mr-ti に接頭辞 съ- が付加されて作られた形が съмръть となる¹⁶。古ロシア語でも「疫病」を表すためにこの語は用いられた。このことは次の 2 節に見る年代記の例で示されるが、ここで一例をあげておこう。16 世紀の写本で残されている『トゥヴェリ年代記』1158 年の項では、ノヴゴロドに疫病が拡大した様子を次のように記している――

Въ то же лѣто по грѣхомъ по нашимъ морь бысть много въ Новѣгородѣ въ людехъ и въ конехъ яко не льзѣ быше дойти торгъ сквозь городъ...¹⁷

「この年 [=1158 年]、われらが罪ゆえにノヴゴロドの人々と馬の間に大いなる 疫病 が起きた。人々は町を通過して市場に行くこともできなかった……」

これらの例から、морь が疫病を表す語彙として広く用いられたことが確かめられる。しかし同時に、上で見た、ルカによる福音書 21 章に対応するマタイの福音書 24 章 7 節は、同じマリア写本の中で次のように書かれている――

Въстанетъ во ѣзѣкъ на ѣзѣкъ. і цѣство на цѣство. і вѣдѣтъ глади и пагоубы. і трѣси по мѣста.¹⁸

「民族が民族に、王国は王国に向かい立ち上がり、飢えと 疫病 と地震がいたるところに起こるだろう」

この箇所で使用されているギリシャ語はルカ 21 章と同じ λοιμοί καὶ λοιμοί καὶ σεισμοί で「疫病」は λοιμοί だが、スラヴ語訳は пагоубы となっているのである。

пагоубы（単数は пагоуба）は、古教会スラヴ語では ἀπόλεια「破滅、破壊」の訳語として使われる語で、たとえば『シナイ詩篇』では вѣдѣтъ ꙗ҃ѡ да е҃го въ пагоубѣхъ: въ родъ е҃динъ да потрѣбитъ сѣа нима е҃го¹⁹（「破滅に陥る」（新共同訳では「子孫は断たれ）」と、

ほんらいの「破滅」の意味で用いている。けれども同じ *пагоуба* が、上記のマリア写本マタイ 24 にあるように「疫病」を表す語として用いられたのも事実である。キリル文字で書かれた古教会スラヴ語カノンのスプラシル文集にも「疫病」の意味の用例を見ることができる――

МОЛИТЕ БОГА ОТЪ РАТИИ* ОТЪ ГЛАДАН ОТЪ ПАГОУБЪИ (έν . . . λοιμῶ) ²⁰

「戦争、飢え、疫病から（免れるよう）神に祈りなさい」

пагоуба は「破滅させる、滅ぼす」を意味する *гоубити*、*гъбнѣти* などと同じ語根から、接頭辞 *pa-* と接尾辞 *-ba* の付加により形成された名詞で、これと並び、同語根から派生した *гъбѣль* や *гоубительство*（いずれも「破滅」）もやはり疫病をさす語として用いられた。それぞれの例を示しておこう。

Ъ ГЛАДА (И) ГОУБИТЕЛЬСТВА* (И) ТРОУСА ПОТОПА ОГНА (ἀπὸ . . . λοιμοῦ) ²¹

「飢えと疫病、地震、洪水、火災で」

БОУДОУТЪ ГЪБѢЛЬ СЕ НЕ ТИХОСТИ НИ ПОКОЯ ТЕЛЕСЕМЪ ²²

「疫病が起り平安も身体の安泰もなくなるだろう」

「死」「破滅」とならび、*язва* や *рана* という、ほんらいは「傷」「(神からの) 打撃、一撃」を表す語彙も、疫病を表すために用いられた。この例にはヨハネの黙示録の古スラヴ語訳をあげることができる。先出の列王紀の場合と同じく、東方正教会では、ヨハネの黙示録は、新約聖書の中でも福音書や使徒行伝のように礼拝に用いられることがなく、そのため 14 世紀より前のスラヴ語訳の黙示録写本はほとんどない。しかしおそらく黙示録も古教会スラヴ語の時代に、新約聖書のほかの書とともに訳されたものと考えられる。このことは、ロシアのゲンナジー聖書と、ボスニアの司祭フヴァルの文集（1404 年）²³ という、直接的接点がありそうにない二つの文書に含まれるスラヴ語訳の黙示録がほぼ一致することから推測される。

ヨハネの黙示録には、終末論のつねとして、天変地異や飢饉、疫病を示す表現が含まれているが、たとえばこの 11-6 では、ゲンナジー聖書もフヴァル文集も「疫病」を示す言葉として *язва* を用いている――

ゲンナジー聖書

. . . ОБЛАСТЬ ИМАТА ИМѢТИ НА ВОДАХ ОБРАЩАТИСИ В КРОВЬ И ПОРАЗИТИ ЗЕМЛЮ ВСАКОЮ ЯЗВОЮ ²⁴

「(この 2 人は) 水が血に変わるよう働きかける力をもち地にあらゆる災いをもたらす力をもっている」

フヴァルの黙示録

... ОБЛАСТЬ ИМЪТЫ ИМАТА НА ВОДАХЪ ОБРАШТАТЫ Є ВЪ КРЪВЬ И ПОРАЗЫТЫ ЗЕМЛОУ ВСАКОЮ ҃ЗВОЮ²⁵

この部分のギリシャ聖書は ἐν πάσῃ πληγῇ ὀσάκις ἐάν²⁶ であり「災い」(＝疫病)には πληγῇ が用いられているのだが、バウアーの『新約聖書ギリシャ語対英辞典』で πληγῇ は「打撃、傷」のほかに「(神による) 突然の災厄 (plague)」の意味があるとし、『黙示録』のこの箇所を挙げている²⁷。ここから πληγῇ の訳語として使われた ҃ЗВО も疫病の代替表現であったと考えることができる。

1.3. 以上に概観してきたように、古いスラヴ語では、「疫病」を表す言葉として、「死」「破滅」「傷、打撃」といった語が用いられていた。これらはいずれも病気そのものを表すのではなく、その顕著な結果(「死」)や、社会的影響(「破滅」)、あるいはその起こり方(「神の一撃」)といった面からメトニミー的に用いられるようになったといえるかもしれない。

もちろんこれらとならび、病名を表す語彙も存在した。太古から知られていた天然痘を表す осъпы (単数は осъпа) である。この語は、ロシア語 оспа、ウクライナ語 віспа、ブルガリア語 оспа 「発疹」、セルビア語 оспа 「天然痘」などスラヴ語に広く見られ、スラヴ祖語 *o-sъp- に由来し、古教会スラヴ語カノンのスプラシル文集に осъпами на҃д волѣти страна та²⁸ 「そしてその国は“天然痘”(＝疫病)で病み始めた」という例を見ることができる。

天然痘は、人だけでなく家畜や野生動物にも感染するため、古くより、広く拡大する災厄として知られていた。осъпа は、語根から派生した動詞 сѹпа-ти 「播く」からも推測されるように、身体的に現れる発疹から付けられた名であろう。しかし、感染力が強く、罹患すればまずは死を避けられない恐ろしい病として、疫病一般を表すためにも用いられたと考えられる。上のスプラシル文集の例も、この疫病がじっさいに天然痘だったのかそれとも別の疫病だったのかは不明である。

以上の、最古期文語文献からみたスラヴ人にとっての「疫病」を、ギリシャ語の類義語との対応もあわせてまとめると、次の表のようになる。疫病の正体がわからなかった中世において、人々はこの災厄を、さまざまな特徴からとらえて命名していたのだった。

疫病 λοιμός			
“死”	“破滅”	“傷、神の一撃”	天然痘
моръ, сѣморътъ θάνατος	пагоуба, гъибель, гоубительство ἀπόλεια	ιαзва, рана πληγή	оѣпа λοιμική νόσος

моръ と пагоуба がほぼ同義語であったことは、同じ福音書写本に、λοιμός の訳語としてこれらが用いられていたことから推測される。とはいえこれらの語彙の選択に何がか関与的だったのかはいまのところ不明である。これについては、古スラヴ語文献に現れる同義語の分布の議論を参照しながら、また論考を改めて考察すべき問題としたい。

なお、現代スラヴの諸言語には、ロシア語で чума 「ペスト」を表す語彙がある：ウクライナ語 чума, джума, 中期ブルガリア語 чума (できもの、腫れ物)、ブルガリア語 чума, セルビア語 чума, ポーランド語 dzuma²⁹。これについてはチュルク語起源説、ギリシャ語 κῦμα (「波」) 起源説などがあるが、後者についてファスマーは懐疑的である。じっさい κῦμα は福音書などでは βλῆνα や βλῆνениε とスラヴ語に訳されており、少なくとも最古期文語のコーパスで、κῦμα を чума と訳するような直接的な関係は検証されない。また以下の章で見るように、чума が現れるのは比較的後の時代であり、スラヴ語がチュルク系言語から借用したという説は有力であるように思われる。

2. 歴史記述の中の疫病——ロシア年代記の記述から

2.1. 前節では、古スラヴ文献において「疫病」が、ほんらいは死や破滅、傷などさまざまな喪失や損失を意味した語彙によって表されていたことを確認した。

本節では、疫病という災厄が歴史記述でどう扱われていたのかを、中世スラヴ世界で長い伝統をもち、多くの写本が残されているロシアの年代記の記述から探ってみたい。

スラヴ世界、とくに東方教会スラヴ世界の歴史記述は、ビザンチウムで作られた『修道士ゲオルギオス (Γεώργιος Ἀμαρτωλός [ロシア語で Георгий Амартоλος]) の年代記』(9世紀)や、『イオアン・マララス (Ἰωάννης Μαλάλας [Иоанн Малала]) の年代記』(6世紀)、あるいは少し後年になるが『コンスタンティン・マナセス (Κωνσταντῖνος Μανασσῆς [Константин Манассия]) の年代記』(12世紀)などが下地になって作られた。ロシア語で Летопись と呼ばれる年代記は編年体で書かれているが、完全に史実のみを記しているわけではなく、キリスト教受容以前から存在していた民間伝承や、ビザンツ由来の聖人伝などを取り入れたと思われる記述も含み、ときに史実性が疑わしい場合もある。とはいえ、史料そのものが少ない時代の文献であり、中世スラヴ人の価値観や当時の社会状況を知るための手がかりとして重要視されている。

さて、キエフ・ルーシの主要都市で作られたさまざまな年代記には、たびたび疫病についての記述が見られる。スポトニツキー&スポトニツカヤの『ペストの歴史概説』は、おもな年代記に記された11-14世紀の疫病を一覧にしているが、これを見るとほぼ5-15年に一度、ロシアのどこかで疫病らしき災厄が起きている³⁰。

ここに含まれた記述でもっとも古いのは、後に示す1092年のものだが、これに先立って、『原初年代記』（ラヴレンチー写本）³¹の1060年の項に、疫病らしきものについての記述がみられる――

Въ семь же лѣтъъ Изаславъ, и Стославъ и Всеволодъ и Всеславъ совокупиша вои бецислены, и поидоша на конихъ и в лодыахъ бецислено множество, на Торкы. Се слышавше Торци убоахаса провѣгоша и до сего днѣ, и помроша вѣгаючи. Божнымъ гнѣвомъ гоними, вви ѿ зимы, друзии же гладомъ ини же моромъ и судомъ божнымъ³²

「この年イズィヤスラフ、スヴャトスラフ、フセヴオロト、フセスラフは無数の兵を集め、馬と船の大群で遊牧民（トルキ）に進軍した。これを聞いたトルキたちは恐れ、退散して今に至る。彼らは逃げる途中で死んだが、これは神の怒りによるもので、ある者は寒さで、別の者は飢えで、またあるいは疫病で、神の裁きにあったのである。」

まず言語表現だが、下線をひいた箇所で見られるように、1節でみた「死」に語根をもつ *моръ* が用いられている。*моръ* は、以下でも示すように、ロシア年代記で疫病を表すためにもっともよく使用される語彙である。もちろん病原菌など特定できない時代において *моръ* がどのような種類の疫病だったのか、あるいは本当に疫病だったのかも不明な場合もある。じっさい、上掲の箇所も、ワシーリエフ&シーガルの『ロシアにおける疫病の歴史』では、これに該当する年にロシアで疫病は起きていなかっただろうとしている³³。とはいえ、疫病が東方の遊牧民との戦いに結び付けられていることや、寒さや飢餓とともに襲ってくる神の怒りとしての「疫病」が描かれている点は、本稿冒頭に引用した『列王紀』の文言にも通ずるものであり、ヘブライズム以来の疫病イメージが、キリスト教を通じてキエフ・ルーシにも浸透していたことが伺い知れる例である。

実質的には、上述したように、1092年に、現ベラルーシに位置するポラツクとその周辺におきた疫病が、ロシアで記録された最古の疫病とみられる³⁴。やや長くなるが、この部分を抜き出してみよう。すると、以下のように、疫病の襲来とその被害が恐ろしげに記されていることがわかる――

В лѣто г.҃. х. [6600] Предивно вѣсѣ [чюдо] у Полотьскѣ въ мѣсѣтъ: бываше в ноци тутьнъ,

стонаше по улици, јако члѣвци рицноше вѣси. аще кто выѣзаше ис хоромны, хотя видѣти, и лбѣ оуязвенъ будаше невидимо ѿ вѣсовъ ѣзвою, и с того оумираху, и не смаху излазити ис хоромъ. По сѣмъ же наѣаша во дне ѣвлатиса на конихъ, и не вѣ их видѣти самѣх, но конь ихъ видѣти копыта, и тако уязвляху люди плотьскыя и него власть.³⁵

「6600 [=1092] 年ポラツクで悪夢のようなことが起きた。夜中に足音が聞こえ人の唸り声のようなものが屋外に響いた。何事かと見ようと思って家から外に出た者は、何もわからないまま悪霊に襲われ、そのために死んだ。それで人々は家から出られなかった。続く日には馬にも現れ始めたが、馬の場合は体には現れず、蹄にそれは現れた。このようにポラツクの町とその領土の人々は災厄にみまわれた」

ここで述べられている病がじっさいどのようなものだったかはもちろん不明だが、疫病であったことは、共同体に急に襲ってきた疾病の記述ばかりでなく、*оуязвенъ* (<*оуязвити*)、*уязвляху* という、1 節で見た *язва* 「傷、打撃」の派生語が使用されていることから推測される。「馬にも現れ」蹄にそれが顕在化したとあることから、これを文字通りに理解すれば、天然痘の類が起きたのかもしれない。また、この後には続けて、同じ年に日照りが続き、再度ポロヴェツ人の襲来があったと述べられ、さらに次のように続けられている――

Въ си же веремена мнози чловци умираху различными недугы, јакоже глху продающе кореты, јако продахомъ кореты ѿ Филипова дне до масопуста .z. тысячь. Се же бы за грѣхы наша, јако оумножишася грѣси наши и неправды. Се же наведе на ны вѣ, вела на имѣти покаяные и вѣстагнутиса ѿ грѣха, и ѿ зависти, и ѿ прогнхъ злыхъ дѣлъ неприазниъ.³⁶

「この年多くの人がさまざまな病で死に、墓標を売る者のいうことには、フィリポの日 [正教会では 11 月 14 日] から大齋期の始めまでの間に 7000 の墓標を売った。これは我らが罪と不正が増したためであり、悔い改めて、罪から身を遠ざけるようにという神の思し召しである」

ここでは「さまざまな病 (недугы) で」多くの死者があった、とあり、しかしやはりこの災厄は神の罰であると述べている。そして、疫病の災いを避けるための悔い改めを説く教訓的な文言によって記述は結ばれるのである。このような疫病観はその後も長く続き、「疫病」*моръ* はしばしば *гладъ* 「飢餓」や戦乱、大雨や地震などの自然災害とともに言及されていく。1500 年代前半に作られた『ニコン年代記』1230 年の項にも、気候異常と飢饉、そして疫病が起きたと記されている――

... И разгнѣвася Богъ, и опустоши землю, и поиде дождь отъ Благовѣщенія до Ильина дни, день и ноцѣ, и возста студень, и быша мрази велици, и пови всяко жито [...] и бысть моръ въ людехъ отъ глада великъ тако не моши и погребити ихъ³⁷

「神は怒り大地を荒れさせ、そして受胎告知の日から聖イリヤの日まで昼も夜も雨が続いた。それから霜が到来し大いなる寒気が起こりあらゆる穀物を枯らした [...] 大いなる飢饉から人々の間に疫病が起こり（死者を）埋葬することもできないほどだった」

飢饉、また異民族の襲来や戦争が疫病とともに記されるというパターン化された年代記の記述の中でも、ときには疫病に対する観察らしきものも見られる。たとえば『ヴォスクレセンスキー修道院年代記』1289年の項目には、次のようにある――

того же лѣта бысть моръ на люди и на кони и на всякии скотъ а жито всякое мышъ поѣла; от того ради дороговъ бысть велика и глад, велик бысть по свен Земли Русской³⁸

「この年、人々と馬とあらゆる家畜に疫病が起こり、穀物はネズミが食い尽くした。このために多くの離散があり、大いなる飢餓が全ロシアに起きた」

ここでも、飢饉とともに起きた疫病が描かれているが、それ以前の年代記の記述のように、たんに「疫病で多くの死者が出た」という事象だけではなく、「穀物はネズミが食い尽くした」とネズミの存在について言及している点が注目される。疫学の発達した現代では、「旱魃、洪水、地震といった環境の激変がペストを誘発することも経験上わかっている。そのような事象は往々にして、遠隔地にいる野生の齧歯類の群れ、すなわちペスト菌の宿主を生息地から追い出し、餌や棲みかのある人里へと追いやるからだ」とシゲリストが『文明と病気』の中で述べているように³⁹、飢餓とネズミのような齧歯動物の集団発生と疫病の拡大に因果関係があることが知られている。この年代記の記述では、ごくみじかく、ネズミが食糧を喰い荒らしたと述べているだけだが、ネズミの大量発生と疫病のあいだになんらかの関係があることについて、おぼろげながらも気づいていたのかと思わせるものである。

2.2. 14世紀半ばに全ヨーロッパを襲って歴史に長く記憶されることになったペストの大流行のさまは、ケリー著『黒死病 ペストの中世史』に詳しく描かれている。東方から発したペストは、陸路および海路の通商ルートにのって黒海のクリミアに到達し、そこからいっぽうではコンスタンティノープルへ、さらにダーダネルス海峡を経てギリシャ、バルカン半島からヨーロッパへと北進し、他方では地中海を南下して南ヨーロッパへと広がっていった。ロシア・東欧もまた、この黒死病の波から逃れられ

なかった。

『ロシアにおける疫病の歴史』では、この黒死病の大流行に先立って1320～30年代に世界各地に起きた大雨のことが言及されている⁴⁰。1331年には、南および西ヨーロッパで大雨が降り、キプロスでは20日間雨が降り続けて8000名の死者を出し、また中国では、まず大規模な干ばつが起こった後、大雨が続いた。この本で著者たちは、このような気候異常が14世紀中期の破滅的な黒死病の流行と関係するのかは不明だ、としているが、いっぽうスポトニツキー&スポトニツカヤの『ペストの歴史概説』によれば、ちょうどこの時代すなわち13世紀終わりから14世紀はじめにかけての「小氷河期」の始まりの気候変動が、大規模な疫病の発生の下地を作ったとしている⁴¹。気温低下のためにヨーロッパでは1270年代と1300～1309年のあいだに干魃が、その後1310年代には大量の降水があった。こうした気候異常と、これに起因する食糧不足は、生態系を変え、動物や人の移動や、あるいは広範囲にわたる栄養不良をもたらし、わずかな感染症でもパンデミックにつながった可能性は十分にありえただろう。

ロシアの年代記でも、「大いなる死」の時代すなわち1340年後半から80年代にかけて各地で黒死病が起きたことが記されている。『ヴォスクレセンスキー修道院年代記』1346年の項では、次のように記されている――

Того же лета казнь бысть от бога на люди под восточную страну на городъ Орнагъ на Хазтороань и на Саран и на Бездежь и на прочіе градъы во стараях их бысть моръ силен на Бесермены на Татары и на Ормены и на Обезы и на Жиды и на Фргазы и на Черкасы и всехъ тамо живущихъ яко не ве кому их погребать⁴²

「その年 [1346年] 神の罰が東の国の人々、すなわちオルナチ [ドン川河口の町]、アストラハン、サライ、ベズデジ [ヴォルガ河畔の地名] にくんだり、ユダヤ人、イタリア人、チェルカス人、それにその地の住人の間におおいなる疫病がおこり、彼らを埋葬するものさえいないほどだった」

この記述によれば、1346年に黒死病はドン川河口域からヴォルガ流域、カフカース、カスピ海沿岸からアゾフ海、そして黒海に至る範囲に広がったと見られる。14世紀頃のカスピ海から黒海北岸には、ユダヤ人、ジェノヴァやヴェネツァのイタリア商人たちがコロニーを作り商業活動をしていたことが知られているが、こうした人々も、疫病の魔手を逃れられなかったことが、この記述からわかる。

ロシアの黒死病は1350年頃にノヴゴロドやプスコフ、モスクワにも広がったのち、いったん収束する。しかし1360年に新たな波が生じ、北方の商業都市プスコフは大きな被害にあった。『プスコフ第2年代記』では、このことについてごく短く記している――

Быть моръ золъ въ Псковѣ и по селомъ и по всен⁴³

「その年プスコフの町と村々に大いなる疫病が起こった」

いっぽう同じ出来事を、この疫病の影響を受けたノヴゴロドの年代記は、追加情報を加えてこう伝える――

Быть моръ въ Псковѣ и владыка Алѣксеи ѣха к нимъ позванъ Посковици и городъ Псковскии съ кресты обходи и .Г. литургии свѣршивъ и приѣха в Новъгородъ; а Псковцемъ оттолѣ нача личши быти милость Божиа преста моръ⁴⁴

「プスコフに疫病が起こり、アレクセイ大主教がプスコフ市民に呼ばれ彼らのもとに赴いた。そして十字架をもってプスコフの町を回り3度礼拝を行ってからノヴゴロドへの帰途についた。そのあとプスコフは神の慈悲により良くなり、疫病は治った」

年代記によると、プスコフはノヴゴロドの大主教のお祈りのおかげで救われたが、救いをもたらしたアレクセイ大主教当人は、ノヴゴロドに帰還する旅の途中でペストのために死去するという、気の毒な運命に見舞われることになったらしい。

ヨーロッパではさらに1360年代から80年代に、何度かペストの流行を見た。ロシアでも、その後もたびたび年代記に疫病の記述が見られる。上述のとおり、年代記の記述では疫病は神の下した罰とされているが、そうした記述の合間にも、病気の症状の観察を示す記述も現れるようになる。1360年にプスコフでペストが発生した時の様子を、『プスコフ第1年代記』の作者はつぎのように記している――

бысть по Псковѣ вротыи моръ лють zelo; вѣше тогда се знаменина егда кому гдѣ выложитса желѣза то вскорѣ оумираше; мнози же умираху тою болезнию много же время тои въ смерти належаши на людѣх⁴⁵

「プスコフにふたたび大いなる疫病が起きた。この現れはといえば横痃〔リンパ節の浮腫〕が見えれば、すぐ死に至るものだった。この病で多くの者が死んだ。長い間病は人々の間で流行した」

1347年にペスト患者を乗せたジェノヴァのガレー船がメッシーナに到着したときの様子を修道士ピアツァは「腫れ物のような […] レンズ豆くらいの大きさのしこりが太股か腕にできた […] もはや治療の手立てはなく、死ぬしかなかった」と描いたというが⁴⁶、おそらく上記のプスコフ第1年代記の作者もこれと似たような症状を見て、

これを記したのだろう。『ヴォスクレセンスキー修道院年代記』1363年の項には、さらに詳細な症状の記述がある――

Бысть моръ великъ в Новѣгородѣ въ Нижнемъ; харкаху людїе кровю а инїи желѣзою болаху и не долго болаху но два дни или три а инїе єдинъ день болѣвшє умираху [. . .] инїи желѣзою умираху; желѣза не у всакого бывашє въ єдином мѣстѣ но одному на шеѣ а иному подъ скулою а иному под пазухою, другому за лопаткою прорѣчим же на стегнех . . .⁴⁷

「ニージニーノヴゴロドに疫病が起きた。ある者は血を吐き別のもは横痃に苦しみ、2、3日の間病むか、あるいは1日病んで死んだ […] ある者は横痃で死んだが、現れ方は誰でも同じ場所ではなかった。人によって首、頬骨、あるいは脇の下、または肩や足の付け根などに現れた……」

このように、リンパ節や関節に腫れ物（年代記ではжѣлеза）ができ、高熱を出して死に至る状況が当時なりの客観的な眼差しで記されており、こうした記述からは、時代とともに疫病に対する観察眼や、疫病の伝播という認識が芽生えてきたことを読み取ることができる。

とはいえ、対処策という点では、中世の人々は古代人とそれほど変わりがなかったように見える。東方教会圏でも、西欧と同様に、中世の医術はおもに修道院によって担われ、薬草による治療が行われた。しかしキエフ・ルーシについてみれば、おそらくビザンツやブルガリアから伝わったはずの医学や薬学に関する知識をまとめた形で記した文書は、残されていない⁴⁸。『古ロシア時代の医術』で著者らは、キエフ・ルーシ時代に作られた様々な文書の中に含まれた病気や怪我についての断片的な記述を列挙して、中世ロシアにおける“医術的文化の水準の高さ”を示そうと躍起になっているようだが⁴⁹、それらのほとんどはビザンツやブルガリアから伝えられた説教集など宗教的な教えの中にエピソード的に織り込まれたものである。確かに、15世紀も末になれば、たとえばキリル・ベロゼルスキー修道院のイエフロシーンが書き残した、治療についての短い文書を見いだすことができる――

аще кто имать у себе миро святыа Богородици или стѣго миро димитриа [. . .] и аще полуцитєа болѣзнь вноутри. да повелить первю литоургию пѣти пресѣви бѣи а миро да воудѣть на стѣви трапецѣ . . .⁵⁰

「もし聖マリアの聖油あるいは聖ドミートリーの聖油があり […] もし体に病を得たなら、司祭が礼拝をとりおこない聖母に祈り、聖なる食卓に聖油を置き……」

これをイエフロシーンがどこから写したのかは不明だが、いずれにしても内容は、病

気になった者には聖油を塗り神に祈るのがよい、目の病なら祈りながら目にこれを塗り、体の病なら体全体に塗るとよい、というもので、基本的には、病を癒すための祈祷の一種の域を出ていない。

16世紀後半のイワン雷帝の時代になると、ドイツのリューベックで1492年に印刷された薬草書 *Hortis Sanitaris* (『薬草の園』) のロシア語訳 (ポーランド語経由の重訳か?) *Благопрохладный цветник. Ветроград здравью* がイワン雷帝のために作られるなど、ロシアにも西欧の医学知識が伝わっていった。とはいえ、個人のかかる疾病についてはともかく、集団的疾患である感染症に対しては、年代記の数々の疫病発生記述にもあるとおり、神の罰、でなければ「呪い」「邪視」や悪霊、妖術師の仕業とされていた。ロマノフ朝の初代皇帝となったミハイル・フョードルヴィチ・ロマノフ [1596-1645] も1632年、プスコフの司令官たちに宛てて、偵察兵たちの報告として、リトアニアの町では妖術使いの女たちが、ロシアに輸出するホップに呪いをかけ、これによってロシアの人々の間に疫病が流行るよう企んでいると伝える文書を送っている⁵¹。

西欧でも、本格的な疫学は18世紀によく始まるが、それでも、ミハイル・フョードルヴィチがこの手紙を書いた同じ年、オランダでは、のちに顕微鏡を発明し、微生物の存在を明らかにしてその後の病原菌研究の道を開いたアントニー・ファン・レーウェンフック [1632-1723] が生まれている。ロシア、そして東方教会文化圏で、疫病が伝染性の疾患であるという認識に至るまでには、はるかに長い時間が必要だったのである。

3. セルビアの医療文書『ヒランダル医術文集』

中世ロシアの疫病に対する認識や対応のあり方は、疫病が人知を超えた現象で、神に祈るほかはないという正教会の価値観を反映したものと見ることができるだろう。西欧では、下記にもふれるように、10世紀頃から学問としての医学が確立し、12世紀にはイタリアのサレルノなどで大学が設置され、医師が養成されるようになったのに比して、東方教会文化圏スラヴ地域では、そのような制度が構築されなかった。このことも、疾病全般に対する正教圏スラヴ世界の、運命論的価値観をより根強いものとしたといえるかもしれない。とはいえ、正教会文化における疾病対応がどこも一律でなかったことは、ここに紹介する中世セルビアの『ヒランダル医術文書 (Хиландарски медицински кодекс)』が示している。

中世セルビアの繁栄を築いたネマニッチ朝は、ビザンツからキリスト教の教義や文化を吸収した。13世紀後半から14世紀初めにセルビアを治めたステファン・ウロシイ II 世ミルティン [1253-1321] は、コンスタンティノーブルにセルビア修道院プロドロムを作り、そこに病院を設けるなど、ビザンツ医術の習学に努めた。また、この時

代に領土をバルカン半島南西部に拡大し、アドリア海沿岸までを支配下に収めたことから、対岸イタリアの文化—医術ではとくに、11世紀すでに医術の先進地としてヨーロッパに知られていたサレルノ学派や、13世紀から発展したモンペリエ医学の知識も得るに至った。こうした地政学的条件を背景に『ホドシ修道院医薬書 *Ходошов сборник*』⁵²などの医術文書が現れたと考えられる。『ホドシ医薬書』は1380年頃にセルビアのどこかで作られ、ハンガリーの古都セーケシュフェヘルヴァールからペシュトの修道院を経てホドシ修道院に19世紀に渡り、そこでシャファーリクによって発見された。天文学や博物誌など、さまざまなテーマの文書に加え、医術や薬草についての文書が含まれている。これら医術的内容のテキストの底本には、サレルノ学派のヨハネス・プラテアリウス (Platearius, Joannes I [生没年不詳]) と息子のヨハネス・プラテアリウス (Platearius, Joannes II [1120–1150?]) の『実地要綱 (Practica brevis)』があるとされている⁵³。

しかしながら、疫病という点で興味深いのは『ヒランダル医術文集』である。この文書は、1951年にギリシャの聖山アトスのセルビア修道院ヒランダルで発見されたもので、13～15世紀にかけて作られた医療文書の写本を、最終的に16世紀頃にコーデクスとしてまとめたものである⁵⁴。中にはさまざまな病気の症状や原因と対処法、また薬草の効用と治療法が記されており、ギリシャ語やラテン語で伝えられたサレルノ学派やモンペリエ学派の医学文書の翻訳に基づいていると考えられる。言語はセルビアリセンションの教会スラヴ語だが、写本には、おそらくここにいたるまでに生じた書き換えや書き足し、また誤記によると思われる意味不明の箇所も少なからずあり、形成の経緯には不明なところが多々残されている。

このヒランダル医術文書には、疫病、すなわちさまざまな伝染性の病気、天然痘、マラリアに関する記述があり、ここでは疫病全般にはもっぱら *чума, чумни род* という言葉が用いられている。*чума* は、1節にふれたように、現代ロシア語やブルガリア語で「ペスト」を表す語彙だが、ヒランダル文書の記述をみると、おそらく現代では腸チフスやパラチフスとして知られる伝染病や、なんらかの細菌や微生物による発熱性の感染症についてもこの言葉を用いている。1節でみたような、古スラヴ文献に用いられた *морь* や *гибель, пагуба* などは用いられていない。また、現代セルビア語で「ペスト」やパンデミックをあらわすためには *куга* が用いられるが、これも現れていない。

疫病の原因についてのこの医術書の記述は、あきらかにミアズマ説に依拠したものと見える。ミアズマ説 (miasma theory) は、古代ギリシャのヒポクラテスや、その後の古代ローマ時代のガレノスに端をもち、19世紀にいたるまで広くヨーロッパで信じられた考えで、腐敗した空気すなわち瘴気 (*μίασμα*) と、これが引き起こすあらゆる生活環境の汚染が疫病をもたらすというものである。19世紀以後の細菌の発見以

後は廃れたが、多くの研究者は、この考え方を、神の罰や呪詛のせいとする古代以来の疫病観に比べれば、はるかに科学的であり、近代以後の疫学の原点となったと考えている⁵⁵。

ヒランダル医術文書の疫病に関する記述を、少し追ってみよう。ここでは、アリストテレスのことばを引用しながら、それ自体は汚れることのない四元素すなわち水、地、火、風、とりわけ水や風が汚される場合に疫病がおこるとし、これを二つの場合に分けている。そのうちの一つは、人為的に、つまり「戦争で死んだ兵士の遺体を水に投げる、家畜の死骸を放置して腐敗させる」などによって空気や水が毒されることにより、疫病が発生する、というもので、もう一つの場合は、*небесни бълвзнь* [бълвзнь の間違い?]「天空の病」の場合である。後者の説明にはこうある――

МОКРИНА ВЕЛИКА КОЮ ПРИМА ВЪЗДУХЪ ВЪ СЕВЪ И СЪ ВНИМЪ ВЕЛИКОМЪ МОКРИННМЪ ВМЕКСИ ПАРЕ И ДИМВЪ ВСТРЕ И ЧИНИТЪ ИХЪ ГНИТИ И ЗЕМЛЯ СЕ ТРЪПИ И ТРЪПЪНА РАДИ ГНИВЪ ЗЕМЛЯ И НЕ ТЪКМЪ ЗЕМЛЯ НЪ И ВЪДА⁵⁶

「空気が湿気を吸収し、この湿気が水蒸気と濃霧を飽和させこれらを汚染する。それにより大地もまた影響され、そのために、大地のみならず水も腐る」

前者の瘴気との違いは、前者が人為的な要因で空気や水が汚されるのに対し、後者では湿度が原因で瘴気が発生するとみなす点にあるように読める。じっさい、この後には、春に南風が吹き続け、そのために空気が湿る場合、または、夏に夜の冷え込みが強く昼は曇りがちで暖かい場合、あるいは酷暑や冷夏で天候が変わりやすく、風向きが始終変わる場合などに空気の腐敗が起こり、この毒された空気を肺に入れた人間、生き物は力が弱り高熱を発するに至る、と空気中の湿度の高まりと疫病の流行を結びつける記述がある⁵⁷。

湿気と伝染病の因果関係はともかく、ここに記されている「この悪しき空気は、人を内から支配するが、身を遠ざけることができない者以外には、また健全な体を持つ者には、移らない」(СЪИ ВЪЗДУХЪ ВЪСЕГДА ВЪДЕТЪ ВЪ ЧЛОВЪКА И СПРАВАРЪ. И НЕ ИДЕТЪ У ДРУЗЪХЪ ТЪКМО ВЪ ВНЕХЪ КОИ СЕ НЕ УМЪЮ ЧУВАТИ ИЗ ДАЛЕКА И ИМАЮ И ПЛЪНО ТЪВЛО) は注意を引く。この部分を、カティチの現代セルビア語翻訳は「あらかじめ予防措置を講じることができない者」と訳し、*из далека* を時間的な意味で解釈しているが、単純に「距離をおいて」とも読める。そのように読めば、感染予防に、今でいうところの「社会的距離」が重要であることを経験から知っていたことを思わせる一文である。

この文書では、疫病の対処法も記されているが、その筆頭に挙げられているのは、古代ギリシャのヒポクラテス以来ヨーロッパで長く、さまざまな病の治療法として用いられてきた瀉血であり、とくに高熱を発する疫病患者にはこれが有効であるとして

いる。また、疫病は空気が汚染され腐敗する瘴気〔ヒランダル文集では、гнилость воздушная「空気の腐敗」、очемерение「毒されること」といった表現が使用されている〕で起こるとみなされているわけだが、このことに呼応するように、患者の治療にも空気が重要視されている。つまり患者を風通しのよい空気の清浄なところに寝かせ、空気を喚起することが重要で、空気の浄化のためには、香りのよい植物やリンゴ、オレンジなどを部屋におくのも良い効果が得られる手段である、と説くのである。さらには症状によって、なるべく大量の冷水を飲ませる、あるいは逆に水分を取らせない、といった手当ての方法も示されている。もちろん近代前の知識に基づいて書かれており、混乱した部分も多くはあるが、空気感染への警戒や、今で言えばアロマセラピーとでもいえるような治療の方法は、現代人が読んでも理にかなったものと読める内容である。

ヒランダル医術文集に記されたような医術がじっさいどの程度セルビアの修道院で実施されていたかは不明だが、西欧地中海で発達した医術が東方教会圏にこのような形で伝播していたことを示すという点で、この文書は貴重なものであり、さらなる研究を要する資料であるといえるだろう。

4. おわりに

本稿で紹介したように、文献を通時的に見ると、神の罰として恐れるだけの時代から、疫病を観察し記述することを覚え、やがて治療ということを知るにいたったように、中世のスラヴ人たちの疫病に対する態度が、時とともに変化していったことがわかる。しかしながら、修道院による薬草治療などがあったとはいえ、医療の恩恵にあずかる機会がほとんどなかったと思われる中世の一般民衆にとって、疫病は、どこからか現れて人々に害をなす悪魔的な存在であり続けたのだろう。疫病の、民衆における表象については、栗原成郎著『スラヴ吸血鬼伝説考』に述べられている⁵⁸。ここに記されているのは主に18世紀以後の記録された民間伝承に現れる、魔女や吸血鬼と同一化された存在だが、こうした悪魔的な疫病の表象は、太古からさまざまな地域の民衆の間で作られ作り出されてきたものでもあるように見える。『黒死病 ペストの中世史』では、アメリカの先住民ピマ族の「オイメダム」という「さまよう病」の伝説が紹介されている——「……『どちらからおいでですか』1人の先住民が黒い帽子をかぶった背の高いよそ者に訊ねる。『はるか遠くから……東の海を渡って』とよそ者は答える。『何を運んできたのですか』『死を』と、よそ者は答える」⁵⁹。スラヴの民衆の間に伝えられ、擬人化された疫病の姿は、このオイメダムに通じる。

セルビア語で疫病とくにペストは *куга* だが、これはセルビアの民衆の間で、やはり疫病を表す女性名詞 *чума* と同じように、女性の魔物に擬人化されて疫病の表象となった。これについて、セルビアのヴァーク・カラジッチは、つぎのように記述してい

る——人々が信じるころでは、クーガは女の姿をしていて、おもに屋外で人をつかまえるか、人家にやってきて、私を言うとおりの場所に背負って運んで行け、と命じる。クーガは海のむこうに祖国があり、人々が罪を犯すようになると、神に命じられてその地にやってきて、神が命じただけの数の人々を殺すのだ、と⁶⁰。

ここからは、いっぽうでアメリカの先住民のオイメダムと共通する、さまよう疫病の化身の姿を、またいっぽうではヘブライズム以来の神の罰としての疫病の表象を見ることができる。しかしまた、ヴークは、クーガが猛威を奮っている時には、家の食器をきれいに洗っておかないとクーガに狙われる、という言い伝えも紹介しており、ここからは、衛生の重要性を経験知として人々が知っていたことも窺わせる。

21世紀にはいつて起きたコロナ・パンデミックで世界はパニックに陥り、陰謀説をふくむさまざまな偽情報が、情報化時代のツールである SNS によって世界に拡散した。ウシなど動物の排泄物を飲むとよい、とか、ニンニクを食べると予防になる、とか、中世さながらの“治療法”が世界各地に飛び交い、某大国の大統領はアルコール消毒液を注射するといいらしいと、公の場で口にした。日本でもアマビエがにわかには脚光をあび、さまざまなアマビエグッズが売り出され話題となった。科学技術は中世の頃にくらべ飛躍的に進歩したとはいえ、こうした現実を見る限り、予期せぬ死や病の恐怖に直面したときの人間の本质は、中世の時代から現代に至るまで、さして変わっていないようにも思われる。

注

- 1 日本聖書協会新共同訳による。
- 2 Alfred Rahlfs, Robert Hanhart, *Septuaginta: id est Vetus Testamentum Graece iuxta LXX interpretes* (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2006), Vol. I. p.621.
- 3 *Лавров П. А. Материалы по истории возникновения древнейшей славянской письменности*. Л., 1930. С.77.
- 4 ゲンナジー聖書は、ノヴゴロドの大主教ゲンナジーの指導下にノヴゴロドで作成された。正教圏スラヴ世界ではじめて、新約・旧約聖書の諸書を一つのコーデクスにまとめた。いくつかの書は既存の教会スラヴ語訳の写しだが、歴代志、エズラ記、エステル記などスラヴ語訳が存在しなかった書は、ウルガタから訳されてここに含まれた。
- 5 たとえば *Алексеев А. А. Текстология славянской Библии*. СПб., 1999. С.282. なお旧約聖書の一連の東方教会圏スラヴ語訳はギリシャ語聖書、基本的には LXX に依拠している。
- 6 ロシア語式には『オストロク聖書』。イワン・フョードロフ (1520 頃–1583) により 1581 年に作られた、ロシア最初の活字印刷された聖書。現ウクライナのオストロフで作られた。大部分をゲンナジー聖書と同系譜の写本に依拠している。引用箇所は *Острожская Библия*

1581. Переиздание. С.323.

- 7 スラヴ文献学の伝統で、1100年頃までにマケドニア、ブルガリアで作られた古スラヴ語文書を、古教会スラヴ語の「カノン」=規範書とよぶ。
- 8 *Северьянов С. Н.* Синайская Псалтырь. Глаголический памятник XI века. Петроград. 1922. С.103.
- 9 Rahlfs, *Septuaginta*, Vol.II. p.85.
- 10 とはいえ、古ブルガリア語辞書ではこの箇所 *сѣмрътъ* を *моръ* の意味と定義している：
Иванова Мирчева Д. ред. Старобългарски речник. Т.2. София. 1999. С.833.
- 11 Benjamin Garstad, *Apocalypse. An Alexandrian World Chronicle*, ed. and transl. by Benjamin Garstad (Cambridge Mass : Harvard University Press, 2012), vii-x.
- 12 *Истрин В. М.* Откровение Мефодия патарского и апокрифические видения Даниила в византийской и славяно-русской литературах. М., 1897; Francis Thomson, “The Slavonic translations of Pseudo-Methodius of Olympus. Apocalypse,” *Търновска книжовна школа. Т.4. Културно развитие на българската държава края на XII - XIV век.* София. 1985, pp.143–165; Keiko Mitani, “Intertextuality in Medieval Slavonic Literature: Apocalypse of Pseudo-Methodius and the Legend of the Twelve Fridays,” *Scripta & e-Scripta*, No.19 (2019), pp.145–164.
- 13 *Истрин*, Откровение Мефодия патарского. Тексты, С.94.
- 14 Vatroslav Jagić, *Quattuor Evangeliorum versionis palaeoslovenicae codex Marianus Glagoliticus characteribus Cyrillicis transcriptum.* СПб., 1883. pp.293–294. なおギリシャ聖書でこの箇所は *σεισμοί τε μεγάλοι κατὰ τόπους καὶ λιμοὶ καὶ λοιμοὶ ἔσονται.*
- 15 おなじく古教会スラヴ語カノンのゾグラフ写本でも *І ВЪ ГЛАДИ І ВЪ МОРИ ВЪДЖЪТЪ* とある：
Vatroslav Jagić, *Quattuor evangeliorum Codex Glagoliticus olim Zographensis nunc Petropolitanus* (Berolini, 1879), p.126.
- 16 *Этимологический словарь славянских языков : праславянский лексический фонд / Под ред. О.Н. Турбачев. М., Т.18. 1992. С 101; Т. 19. 1994. С.250–251.*
- 17 *Полное собрание русских летописей. Т.15. Лѣтописный сборник именуемый тверскую летописью.* СПб., 1863. С.226.
- 18 Jagić, *Quattuor Evangeliorum versionis palaeoslovenicae codex Marianus.* p.87. ゾグラフ写本もマリア写本と同じく *ГЛАДИ* と *ПАГОУБЫ* である：
Jagić, *Quattuor evangeliorum Codex Glagoliticus olim Zographensis*, p.34.
- 19 詩篇 108: 13；シナイ詩篇の引用元は *Северьянов*, Синайская Псалтырь. С.145. 同じ箇所の LXX は *εις ἐξολέθρευσιν*: Rahlfs, *Septuaginta*, Vol.II. p.122.
- 20 *Codex Suprasliensis*, f.34r. [原本は <http://suprasliensis.obdurodon.org/>].
- 21 *Орлов М. И.* Литургия святого Василия Великого. Вводные сведения. 1. Греческий и славянский тексты. СПб., 1909. С.243.
- 22 *Беседы на Евангелия. РНБ. Погод. 70.* [Josef Kurz (ed.) *Slovník jazyka staroslověnského*. I. (Prague: Československá akademie věd, 1966), p.448.]
- 23 *Hvalov zbornik* 『フヴァール文集』として知られるもので、新約聖書や詩篇、そのほかいく

- つかの文書が含まれている。文集の冒頭にはグラゴル文字の書き付けがありダルマチアのグラゴル派からもたらされたものと推測される。*Hrvatska enciklopedija* [<http://www.enciklopedija.hr/Natuknica.aspx?ID=26771>]; Đuro Daničić, “Apokalipsa iz Hvalova rukopisa,” *Starine*, 4 (1872), pp.86–118.
- 24 Библия 1499 года и Библия в синодальном переводе. М.: Мизей Библии. Т. 8. 1992. С.459.
- 25 Daničić, “Apokalipsa,” p.98.
- 26 KJB (欽定訳聖書) では “with all plagues” としている [<https://www.kingjamesbibleonline.org/Revelation-11-6/>].
- 27 Frederick Danker, Walter Bauer, *A Greek-English lexicon of the New Testament and other early Christian literature* (Chicago: University of Chicago Press, 2000), p.825.
- 28 Иванова Мирчева (ред.) Старобългарски речник. Т.2. С.111.
- 29 Фасмер М. Этимологический словарь русского языка. Т.4. М., 1987. С.382.
- 30 Супотницкий М.В. Супотницкая Н.С. Очерки истории чумы. Кн. I. Чума добактериологического периода. М., 2006. С.61–64.
- 31 Повесть временных лет. ロシア最古の年代記で、天地創造から 1110 年代までのキエフ・ルーシの歴史を記したもの。14 世紀のラヴレンチー写本と 15 世紀のイパーチー写本知られる。
- 32 Васильев К. Г. Сегал А.Е. (ред. Метелкин А.И.) История эпидемий в России. Материалы и очерки. М., 1960. С.22; 原文引用元は Полное собрание русских летописей. Т.1. Лаврентьевская летопись. Вып.1. Повесть временных лет. Л., 1926. С.163.
- 33 Васильев К. Г. Сегал А.Е. История эпидемий. С.22.
- 34 Ibid. С.22.
- 35 Лаврентьевская летопись. Вып.1. С.214–215.
- 36 Ibid. С.215.
- 37 Полное собрание русских летописей. Т. 10. Никоновская летопись. СПб., 1885. С.101–102.
- 38 『ヴォскресенский монастырь』は 16 世紀のモスクワでつくられたもので、9 世紀から 1541 年までを記述している。引用箇所は Полное собрание русских летописей. Т. 7. Воскресенская летопись. СПб., 1856. С.185.
- 39 シゲリスト 『文明と病気』、第 5 章。
- 40 Васильев К. Г. Сегал А.Е. История эпидемий. С.26.
- 41 Супотницкий М.В. Супотницкая Н.С. Очерки истории чумы. С.84.
- 42 Воскресенская летопись. С. 210.
- 43 Полное Собрание русских летописей. Т. 5. Псковская II летопись. СПб., 1851. С.14.
- 44 Полное Собрание русских летописей. Т. 4. вып. 1. Новгородская IV летопись. СПб., 1915. С.289.
- 45 Псковские летописи. Под ред. А. Н. Насонов. М., 1955. С.103.
- 46 ケリー 『黒死病 ペストの中世史』第 4 章を参照。
- 47 Полное собрание русских летописей. Т.8. Продолжение летописи по Воскресенскому списку. СПб., 1859. С.12.

- 48 *Змеев Л.Ф.* Русские врачевники. Памятники древней письменности. СХІІ. СПб., 1895. С.2.
- 49 *Минский М. Богоявленский Н.А.* Медицина древней Руси. М.: Родина. 2018. 6ff.
- 50 Кирилл Белозерский 22/1099. f.227v-228. このテキストは Памятники старинной русской литературы / Под ред. А.Г. Кушелев-Безвородко. Вып.4. СПб., 1862. С.216 に刊行されている。
- 51 *Соловьев С. М.* История России с древнейших времен. М., 1859. Т.9. Гл. 3 [*Минский М. Богоявленский Н.А.* Медицина древней Руси. С.40]
- 52 プラハ国立博物館シャフアーリクコレクション VV 110-IX F 10 Ш. ホドシ修道院は現在のルーマニア西端に位置するアラドに 11 世紀頃作られた正教会修道院で、19 世紀までセルビア修道院であった。
- 53 *Бреберина М.* Историја хирургије на територији данашње Војводине //Свеске матице српске. Грађа и прилози за културну и друштвену историју. Серија природних наука. Св. 16. Нови Сад. 2014. С.30–31.
- 54 *Катић Р.* Порекло и време настанка хиландарског медицинског кодекса / Р. Катић ред. Хиландарски медицински кодекс N. 517. Перевод. Београд .1989. XXXIII ff.
- 55 たとえば Ajesh Kannadan, “History of the Miasma Theory of Disease,” ESSAI. Vol. 16 (2018), Article 18 [<https://dc.cod.edu/essai/vol16/iss1/18>].
- 56 *Р. Катић.* Хиландарски медицински кодекс N. 517. Приложение, С.262.
- 57 *Ibid.* С.69; Приложение, С.262–263.
- 58 栗原成郎『スラヴ吸血鬼伝説考』、河出書房新社、1991年、141–157頁。
- 59 ジョン・ケリー『黒死病 ペストの中世史』、第1章を参照。
- 60 *Караџић В.С.* Живот и обичаји народа српскога. Беч. 1867. С.219.